

自閉症児の他者理解の発達に関する研究 －地域支援システムにおける個別療育の実践から－

飯塚 一裕

(佐賀短期大学 幼児保育学科)

(平成20年 2 月29日受理)

**A case study on development of the understanding of others in a child with autism
－A consideration from practice of the individual intervention in the local support system－**

Kazuhiro IIZUKA

(*Department of Early Childhood Education and Care Saga Junior College*)

(Accepted February 29, 2008)

Abstract

The purpose of this study is to examine the way of community support to the children with developmental disorders on the basis of a viewpoint of the development. The case of a child with autism was shown, and the changing process of his development was described. Then the process before his understanding another person as the intentional agent became clear. Furthermore, it was suggested that the important point of support for children with autism is to support based on a viewpoint of the development. And it was discussed that we should to cooperate with each other and support children with autism.

Key words : autism 自閉症
individual intervention 個別療育
community support 地域支援
understanding of others 他者理解

1. 問題と目的

近年、我が国における発達障害児・者を取り巻く環境は変化しており、特殊教育から特別支援教育への移行だけでなく、平成17年4月より『発達障害者支援法』が施行されたことにより、地域で子どもの発達を支えていくことの重要性が改めて指摘されている。この発達障害者支援法においては、早期発見・早期療育の必要性や、ライフステージを通した一貫した支援、医療・保健・福祉・教育等の関係機関の連携といったことが重要な点として挙げられている。

発達障害児への支援については、乳幼児期から就労まで一貫した支援を行うための個別支援計画の作成等、各自治体で様々な取り組みが行われている。筆者は、平成11年度より福岡県の前原市と九州大学が共同で取り組んでいるコミュニケーション発達に関する研究に参与しており、そこでは対人的なやりとりで難しさを持つ子ども達についても早期スクリーニングが可能なシステムの整備を目指してきた。この取り組みの中では、発達の難しさをもつ子どもたちが実際に見出されてくるものの、彼らに対するフォローの場が不足している現状があった。早期スクリーニングの主たる目的はより早い時期から発達の難しさを抱える子どもたちへのフォローを行うことであり、何らかの発達援助の機会を用意することが急務と考えられ、母子集団遊びの場としての『わんぱく広場』をはじめ、医師による診断に基づく育児支援を目的とした『発達支援相談』、1対1での臨床心理士との継続的なセラピーを中心とした『個別療育』など、子どもの状態に合わせた行政的なサービスが展開されてきた。

前原市における自閉症児への個別療育に関する現状と課題についてはこれまでに報告が行われているが、その中では特に発達の視点に基づいた支援と関係機関の連携の重要性が示唆されている¹⁾。

Prizantら(1999)は自閉症スペクトラム障害に対する介入のアプローチは、自閉症児に顕著に見られる中核的特性を直接扱うべきであり、環境における社会的合図への注目、自発的コミュニケーションの意図、模倣及び同年齢の子どもや大人との対人的交流などを促進するための計画案が含まれていなければならないと指摘している²⁾。自閉症児において社会性の障害はその中核的特性と考えられており、発達援助を行っていく上での中心的課題の一つである。特に乳幼児期における他者との社会的相互作用の問題は重要であり、その中でも共同注意(Joint Attention)の視点は乳幼児の社会的・認知的発達に大きな役割を担っている。この共同注意は広義には「他者と注意を共有すること」とされ、人間のコミュニケーション発達の基盤とも考えられている概念である。近年、自閉症研究の領域において「心の理論」に関連し

た研究が活発に展開されてきたが、その心の理論に先立つ共同注意は、言語獲得や社会的相互作用のスキル獲得に必要な発達の前身であるという考え方があり³⁾、自閉症は心の理論の欠損だけでなく、それ以前の発達段階である共同注意に障害があると従来の研究で指摘されている⁴⁾。自閉症児の共同注意の障害は、コミュニケーション意図等の心的世界をもつ存在として他者を理解することの難しさに関連していることから、彼らの社会性の障害に対してアプローチする際には、こうした発達の基盤となる点に着目する必要があると考えられる。

また、自閉症を始めとした発達に問題を抱える子どもへの支援に関しては、子どもとその家族を取り巻く関係機関が連携することが必要である。関係機関がお互いの長所を活かした支援を行うためには、支援の関係者が話し合う場を継続的に設け、必要な情報の共有を行った上で、子どもと保護者への一貫した関わりを行っていくことが重要である⁵⁾。さらに、発達障害児を支援するための連携には大きく分けて「分野の異なる専門家が協力し合って支援する横の軸の連携」と「子どもの成長に沿って乳幼児期から成人まで支援する縦の時間軸による連携」との二つがあるとされる⁶⁾。発達に問題を抱える子ども達への支援を考えていく際には、地域社会における理解及び適切な対応が重要となってくる。

こうした視点を鑑み、本研究においては、前原市の地域支援システムの中で問題を見出され個別療育での支援へと結びついた1つの事例を報告し、発達障害児への支援のあり方について検討を行うことを目的とする。特に、幼児期の自閉症に対して発達の視点に基づいた支援を行うことの重要性と、子どもとその保護者に対して地域で支援していくことの必要性について重点的に考察を行いたい。

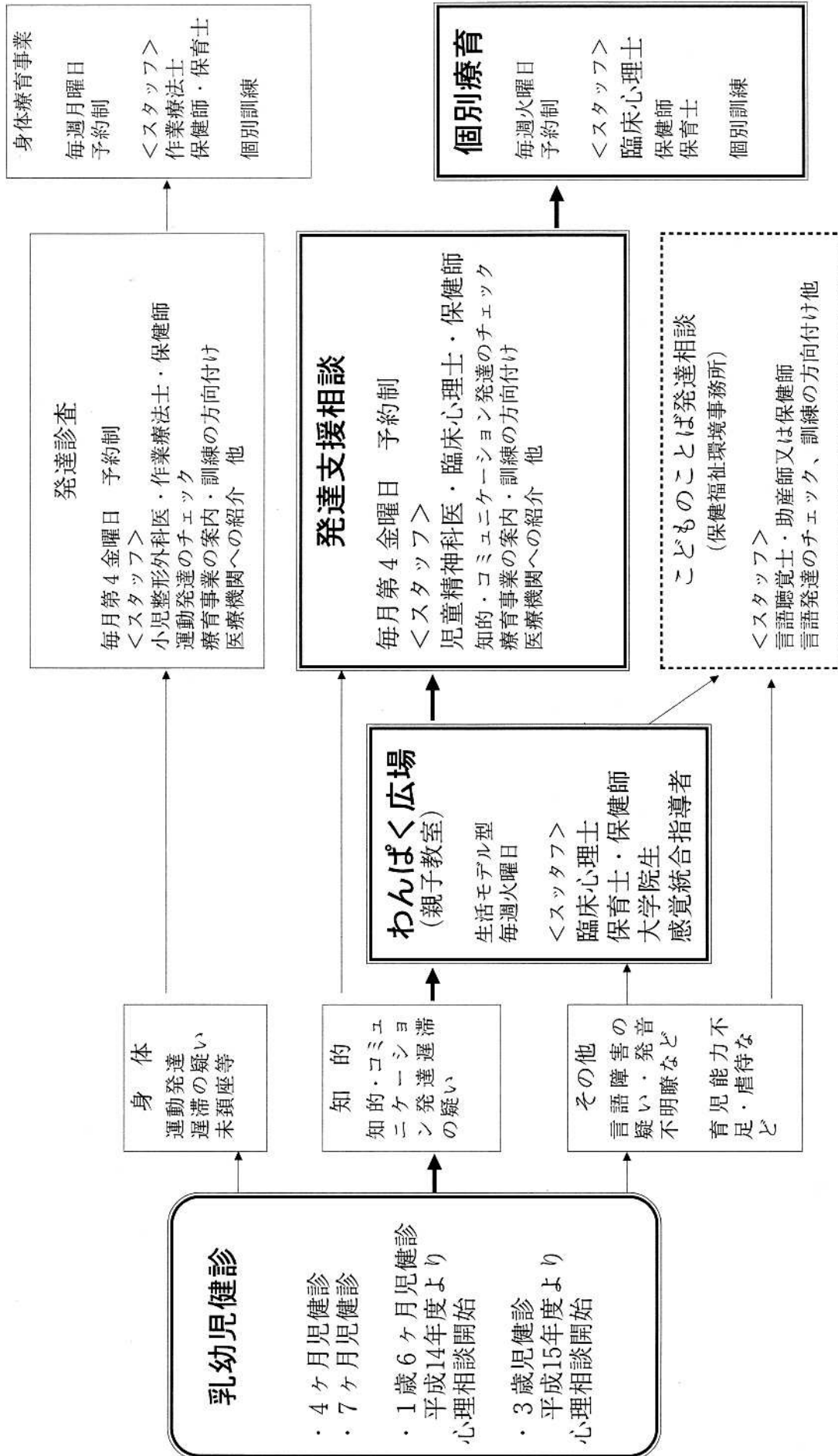
2. 事例の概要

1) 前原市における支援の流れ

以下では、前原市を中心に行われてきた支援の流れを紹介する。

① 乳幼児健診(一次スクリーニング)

乳幼児健診においては、発達に問題を抱える子どもを早期に支援するという観点からのスクリーニングを実施している。ここでは、指さし・交互凝視・他者情動への気づきなど、共同注意に関連する項目を従来の内容に加えたアンケートを、事前に保護者へ配布し健診当日に回収する。さらに1歳6ヶ月・3歳児健診の場において心理相談を実施し、全ての子どもと保護者に対して問診を行うことで、コミュニケーション発達の問題についての詳細なスクリーニングを行っている。健診で発達に何らかの問題が見出された場合には、わんぱく広場や発達支



(図) 前原市における乳幼児健診から療育までの流れ (深田他, 2004より)

援相談を紹介していくことになる。

② わんぱく広場（母子集団遊びの場）

わんぱく広場は、健診等で指摘もしくは相談を受けた、知的またはコミュニケーション発達に遅れのある子どもとその保護者を対象としており、遊びを中心としたプログラムの中に多くの子ども・保護者が参加する、グループプレイの形態をとっている。集団の場としての特性を活かし、子どもや保護者同士のやり取り・交流を促すことが1つのねらいとなっている。親子が一緒に遊ぶことを通して、保護者が子どもの持つ良い面や難しい面を捉えていく場としても重要である。

③ 発達支援相談（二次スクリーニング・医師による診断に基づく育児支援の場）

発達支援相談は、乳幼児健診やわんぱく広場等を通して、個別的な療育が必要と考えられる、あるいは専門的な相談・評価・指導を必要とする親子を対象としている。児童精神科医及び臨床心理士による、二次スクリーニング事業としての意味合いがあり、早期対応の実現、保護者の育児不安の軽減等を主なねらいとしている。

④ 個別療育（個別対応が必要な親子への継続的な療育）

個別療育では、子ども1名につき臨床心理士あるいは臨床発達心理士1名が担当する療育形態を基本とし、子ども・保護者に対するきめ細かい援助を目的としている。対象となるのは、発達支援相談や他の医療機関において個別の指導の必要性を指摘された子ども達であり、対象児との関わりはプレイセラピーを中心とし、子どもの発達段階に合わせて身体遊びや、玩具遊びなどを行っている。日常の具体的な問題や障害受容の問題など、保護者が抱える不安やストレスをできるだけ一緒に引き受け、無理なく家庭で子どもと関われる環境をつくっていくことも個別療育の目的である。

2) 対象児

① 生育歴・発達歴等

X年6月の療育開始時点で2歳11ヶ月の男児1名（以下、Aと記す）。診断名は自閉症。家族構成は祖母、父、母、兄、本児の5人暮らし。母親からの聞き取りによる発達歴は以下の通りである。

妊娠中、母親の糖尿病治療のためインシュリンを投与していた。帝王切開にて出産。出生時体重は3,138g。運動の発達は大体遅かった。つたい歩きの時期が長く、歩行は1歳半からの訓練に参加することでできるようになった。言語発達に関して、発声はあるが有意味語は見られず、喃語レベルに止まっている。社会性の発達については、兄と比較すると全体的に遅れていた。乳児期に人を見て笑いかけたり、イナイイナイバーなどを喜ぶようなことはあまりなかった。人に対しては無視するよう

な感じで、名前を呼んでも振り向くことはなく、身振りを真似ることも見られない。アイコンタクトは難しいが、たまに視線が合うこともある。

② 個別療育までの相談歴・来談経路

1歳7ヶ月：1歳半健診時に歩行が未熟であったため作業療法士による身体療育訓練を開始。

1歳9ヶ月：歩行など運動発達面での問題は見られなくなったが、言語発達の面で遅れが見られていたことから、身体療育訓練を終了し親子遊び教室のわんぱく広場へ参加する。

2歳7ヶ月：発達支援相談にて医師より自閉症の疑いを指摘され、コミュニケーションの発達を促していく必要性についても指摘を受ける。

2歳10ヶ月：2度目の発達支援相談において、個別療育への参加を促す。

2歳11ヶ月：わんぱく広場への参加を休止し、個別療育へ参加。

③ 発達検査の結果

発達検査：

（KIDS typeTを実施 CA=2：7 DA=1：4）

運動1：8 操作1：8 理解言語0：11

表出言語0：10 概念1：3 対子ども社会性1：2

対大人社会性1：4 しつけ1：7 食事1：3

3) 個別療育について

① インテーク（初回面接）時の様子

車・ミニカー・型はめ等の遊具ではある程度集中して遊ぶことができるものの、他者からの関わりに対してはあまり反応を示さない。「Aちゃん」と名前を呼んでも、振り向くことはなかった。「高い高い」や「イナイイナイバー」などでは笑顔も見られ、大人と視線も合いやすいが、本児の方から要求をしてくることは見られなかった。全体的に、部屋の遊具の多さからか注意の持続が難しい面が目立った。その他、ミニカーを決まった配列で並べる等のこだわりや、その場をくるくる回ったり頭を振ったりするなどの行動が見られていた。

保護者面接においては、「言葉をしゃべってほしい」という主訴が確認された。「言葉以外では特に気になることはない」といったことや、保育園へ入園させたいという希望も話された。

② 療育形態

療育は1対1のプレイセラピーの形式で、週1回のペースで実施された。療育の1セッションは40分であり、その内30分間は担当である筆者がAに対する療育を行う。残りの10分は保護者面接の時間であり、保護者（母親）

に対して療育の様子・Aの変化の報告や、家庭の様子の聞き取り等、情報交換を行う。また、筆者が個別療育を行っている間、このような子どもとの関わりの様子はプレイに入らない臨床心理士や保健師と一緒に保護者にも見てもらい、保護者とスタッフで気づいたところ、疑問に思ったところを話し合ったり、プレイの目的や子どもの反応について保護者にオンタイムで伝えたりしている。

③ 療育内容・方針

医師の診断にもあるようにAには自閉症の特徴がみられ、共感性が乏しく他者との関係ができていくことが問題としてあげられた。インテークの場面でも、全体的に他者への関わりの乏しさ、注意の持続の難しさといった問題が見られており、主訴には言葉の問題のみが挙げられていたが、Aに対してはまず遊びを通して人と関わる経験を増やしていくことが重要と思われた。その際、遊具は少なめにし、人とのやりとりで注意が向きやすい環境を設定することを心がけた。

本研究の対象児Aに対しては、①他者へ注意・関心を向ける、②遊びの中で他者へ要求するといったコミュニケーションの基礎的な部分を伸ばしていくことを療育の長期目標として設定した。

3. 事例の経過

第1期（#1～21）

療育開始当初は共感性の乏しさや他者との関わりの難しさが見られていたため、なるべくAと筆者が向かい合い、アイコンタクトが起りやすい形での遊びを中心に行っていった。しかし、近距離での対面には不安を感じるようで回避的な態度を示すことも多く見られていたため（#1～3）、遊びの雰囲気の中で、徐々に対面形式での遊びへと展開していけるような関わりを心がけた。「イナイイナイバー」や「高い高い」、筆者とAが座って向かい合いお互いに手を引っ張り合う「ギッコンボタン」などの遊びの中で、最初は身体に緊張が入っていることもあったが、徐々に笑顔が多く見られるようになってきた（#4）。ジャングルジムに付いていたカーテンを挟む形で「イナイイナイバー」をすると、視線も合い非常に楽しそうな表情を見せ、Aの方からカーテンの前に座って「イナイイナイバー」を待つような様子も見られるようになった。その後「ギッコンボタン」を行うと視線が合い、期待するような表情も見せていた（#6）。

第1期の前半は身体遊び中心であったが、この時期の後半からはボールや積み木等の遊具を介した遊びも導入していった。「イナイイナイバー」などの遊びの中では筆者を意識しているような行動が頻繁に見受けられ、近距離での対面遊びが成立するようになってきた。筆者が

「<バー>」と言った後わざと顔を見せなかったり、他の方向から顔を覗かせたりしても、それを楽しむことができ、途中で別の大人が交代すると少し驚いたような表情でその場を離れていってしまった（#10）。さらに、他者への要求と思われるしぐさも見られるようになってきた。Aがセラピーボールを叩くのに合わせて筆者もボールを叩くと嬉しそうにし、その後は筆者がボールを叩くのを期待するようにこちらの方を笑顔で見ていたり（#20）、ボールを投げようとするAが笑顔で身構えるといったことも見られていた（#21）。また、母親の顔を見て舌を出す真似をした後、他の大人を見て舌を出すことを要求するかのように楽しそうな表情で舌を出す（#19）といった、模倣を楽しむ様子も観察されるようになった。

保護者面接においてはAの問題の整理を中心に言い、現在のAにとっては遊びを通して人と関わる経験を増やすことが重要であり、療育の中でコミュニケーションの基礎的な部分を育てていくことを確認していった。この時期の後半には日常生活におけるAの様々な変化が保護者面接の中で語られた。母親の後追いをしてくるようになったり（#14）、祖父がテレビの前に座しているとその膝の上に座ってきたりする（#20）など、Aから他者に関わっていくことが日常場面でも見られるようになった。このようなAの変化に伴い、母親以外の家族もAを受け入れることができるようになっていった。

#21の後、Aが3歳4ヶ月時に3回目の発達支援相談が行われた。医師からは、以前よりも人への興味・関心が増えているが、他者との関わりはAのサインを感じ取れる人でないと難しいこと等の指摘があった。その他、保育所への入園に向けた話し合いが行われ、加配が付くのであれば保育所での生活も可能であるといった話があった。

第2期（#22～49）

第1期では、他者への興味・関心が様々な場面で見られるようになり、遊びの中で要求するような表情・素振りを見せるようになった。この時期は、遊びの繰り返しの中で「もう1回」という意思を他者に向けることができるように心がけ、これまでAと筆者との間で楽しめていた遊びを継続して行った。その結果、以下のように筆者を意識して様々な形で要求を示すようになってきた。高い高いではもう1回して欲しそうに筆者の傍に寄ってくるようになり（#27）、ソファで筆者が高い高いを「いち、にの、さん」とかけ声をかけて行くと笑顔が見られ、筆者の周りをぐるぐる回り、手を伸ばしてくるような形で要求を示してくることもあった（#32）。スポンジの積み木を一行に並べて渡る遊びでは最初Aの後ろに筆者がついて支えながら行い、その後Aは一人で渡ろうとするが、急に思い立ったように筆者の傍に寄ってき

て手を引いて積み木の所へ連れて行った（＃42）。

また、ジェスチャーによる『ちょうだい』や、手を伸ばすといった要求行動の形成も療育のねらいとした。欲しい物を取りに来た時、筆者が「ちょうだい」と言いながらジェスチャーを作ってあげると、少しではあったがそのまま待つことができていた（＃26）。自発的にジェスチャーは出てこないが待つことはできるようであり、筆者の促しでちょうだいのジェスチャーを行った後、Aが自分で手を開いて差し出してくることが見られた（＃30）。

ソファで筆者が高い高いを「いち、にの、さん」とかけ声をかけて行くと、「い、にっ、さあ」といった感じで比較的明瞭に模倣してくる。筆者がソファから離れてしまうと要求はしてこないが、ソファの近くにいれば腕を引っ張って高い高いを要求していた（＃29）。

第1期の後半頃から家族の意識が変化してきており、家族が母より自閉症と聞かれ、ようやく問題意識を持ち始めたという話があった（＃24）。また、この時期には保育園への入園に伴い、主任の保育士の方にも来談していただき、情報交換を行った（＃29）。ここでは、まずは園の生活、場所、人に慣れるようにあまり無理をせずAの居場所作りから始めたいという方針を確認した。園では、他の子どもがみんな揃って言っていた言葉をワテンポ遅れて真似したり（＃44）、相手の頬を両手で挟み顔を近づけるという形で保育士や他児に関わっていくことが見られるようになった（＃47）。家庭でも、痛い体験をした時に母親の手を自分のおでこに持つていくことが観察され（＃46）、母親からは「丁度人への興味が出ている時に保育園に入れたことはよかった。」との話があった（＃47）。また、言葉の模倣が徐々に出てきていることから、言語聴覚士（ST）による言語訓練への参加も検討された。

第3期（＃50～75）

この時期からは言語聴覚士による言語指導も開始され、保育所・言語指導・個別療育の3機関がAの支援に関係することになった。関係機関の連携を図るため、筆者が保育所と言語指導を行っているクリニックに出向き、それぞれの方針の確認と情報の共有を行った。

療育の場面では筆者の姿を見つけると、すぐに手を引いて普段遊んでいる部屋の方へ向かおうとし、この時期行っていたマット遊びではAから筆者の手を引いてスタート地点まで連れて行くことも見られた（＃57）。また、ちょうだいのジェスチャーがスムーズに出てくるようになってきた（＃49）。お絵描きで筆者が数字を書くとき喜び、5の後に6らしきものを書いていて、この時筆者に数字を書いて欲しかったのか、ちょうだいのジェスチャーを筆者の方にしてきた（＃60）。Aが積み木を全て積み

上げた時に筆者が拍手をすると、Aも嬉しそうに2、3回手を叩く（＃44）。筆者がマットの上を跳んでいる時でも「びよんびよん」「ばー」などの言葉が出ており、最後に筆者が「お片づけするよ。おしまい」と言っていると、Aが「もしまい」と発言することがあった（＃58）。また、ボール遊びでAの転がしたボールがAと筆者の間で止まり、筆者が「届かないよー」と言って手を伸ばしているとAはしばらく不思議そうな表情を見せていたが、ボールをちょこんと触り筆者まで転がしてくれることもあった（＃49）。

この時期、家庭や保育所、療育の場面で自己主張が目立つようになり、思い通りに行かないと様々な形で悔しい気持ちを表現してくることが見受けられ、「わん、つー、すりー」などの発語も報告されるようになった（＃59）。また、保育所ではお名前呼びで手を挙げることもあった（＃56）。

＃62の後、Aが4歳6ヶ月時に第5回目の発達支援相談があり、その際母親からは親の会をつくって欲しいといった要望があった。

第4期（＃76～）

この時期には、要求する際に人の顔を覗きこむことが多くなってきたという話が保護者面接でも語られたように（＃94）、要求場面でより他者を意識した行動が見られるようになってきた。時計のパズルでAがピースをはめていく際、筆者が「1、2…」と指さして答えていく。筆者がわざと指さしをしないとAはじーっと筆者の顔を眺め、その後ちょうだいのジェスチャーで要求してきた（＃86）。セラピーボールの上で10数えてジャンプするといった、ダイナミックな遊びでは笑顔も見られ、筆者の顔を見ながら抱っこを望む仕草で要求をしてくる（＃87）。

また、筆者の遊びの展開（変更）に柔軟に対応してくれるようになり、模倣も多くなってきた。マットの上を筆者の「せーの」に合わせて跳んでいく。Aからも「ちょんちょん」「ばー」などの発言が見られる。笑顔で視線も合いやすい（＃83）。魚釣りゲームで「うーん」と言いながら釣り、釣り上げた時に「やったー」と言う。筆者が頑張って釣り上げた時Aの顔を見ると、Aから「やったー」という発言があった（＃89）。セラピーボールのやりとりで、筆者の頭にボールが当たった時「いたい」と言うのと、笑顔を見せる。その後Aも自分の頭にボールを当て、「いたい」と言っていた（＃91）。

筆者の様子を窺いながら、笑顔でわざと遊具を崩すようなことも見られ（＃95）、ままごと遊びで筆者が食べる真似をすると笑顔を見せ、その後Aもおいしそうに食べる振りをし、筆者が口を開けると差し出して食べさせてくれることもあった（＃99）。

＃94には保育所の担任と加配の保育士が来談され、母

親も同席しての情報交換を実施した。ここでは、現在の療育のねらいを伝えた後に保育所での様子を伺った。この後にも保育所や家庭で言葉が多く出てきている等の話が多く聞かれるようになった（＃96）。

4. 考 察

1) 対象児における他者理解の発達的变化について

本事例の対象児は、療育場面の中で様々な変化を見せるようになってきた。その中でも他者理解という観点からその変化を考察する（表参照）。

第1期：遊んでくれる人としての他者への気付き

療育開始当初は他者からの関わりに反応を示すこともなく、他者にAから関わっていくことも見られなかったが、「ギッコンパッタン」や「イナイイナイバー」等の身体遊びの中で笑顔が多く見られるようになり、他者への興味・関心が様々な場面で見られるようになってきた。また、担当である筆者を意識し、遊びの中で要求するような表情・素振りが見られるようになってきたのもこの時期である。療育場面でAが見せたこれらの行動については、自らに快の情動を引き起こす場面を作り出す人として他者を把握⁷⁾していると考えられ、第1期においては徐々にではあるが他者を快適な刺激を生み出すものとして認識していくようになったものと思われる。

第2期：行為主体としての他者理解

第1期では、「期待するような表情」「笑顔で身構える」等、表情や素振りで要求と思われる行動を示していたが、徐々に要求が「手を引っ張る」「手を伸ばす」などの形で現れるようになった。しかし、この時期の要求行動の際にAが他者の顔を見ることはほとんどなかった。ジュースなど自分の欲しい物がある時に、そちらの方まで大人の手を引っ張って連れて行くといったようなクレーム行動は自閉的特徴を持った子ども達によく見られる現象であるが、このような現象は、要求行動が他者の意図などの心的世界に注意を払わなくても成立する行動とされている⁸⁾。この時期のAの行動は、他者の意図や情動といった心的世界に対して注意・関心を示しているものとは言えないが、遊びの場面で他者の行動を引き出そうとAの方から様々な形で要求を示すなど、他者に向かう行動が頻繁に観察されるようになった。このように他者の行為を引き出すためにAが様々な関わりを他者に向けたことについては、Aが他者を行為主体として認識し始めたことが示唆される。この行為主体としての他者理解に関して、別府（2001）は、自閉症幼児においては伝達意図という心的世界を有する存在としての他者理解ではなく、行為者としての他者理解と関連して成立することを指摘

している⁹⁾。この行為者としての他者理解は、他者の存在だけでなく他者の行為そのものに対する注意を喚起するものであり、他者の行為の自分にとっての意味を理解することに繋がると考えられている。

第3期：行為主体としての他者理解から他者意図理解の芽生えへ

これまで他者からの促しによって「ちょうだい」のジェスチャーを行うことは見られていたが、この時期には遊びの場面で自らジェスチャーで要求してくることが見られるようになった。さらに、言葉の模倣も様々な場面で見受けられることが多くなってきた。この時期の行動は、第2期と同様他者を行為主体として意識しているものと考えられるが、他者の意図理解の芽生えと考えられる行動が見られるようになってきた。表のエピソード（＃49）にあるように、ボール遊びでAの転がしたボールがAと筆者の間で止まり、筆者が「届かないよー」と言って手を伸ばしていると、筆者の顔を見た後にボールをちょこんと触り筆者まで転がしてくれることがあった。このような行動が他者の意図や情動といった心的世界をどの程度理解しているかについては明らかではないが、遊びの中で他者の意図に沿った行動を示しているものと考えられる。この時期のAは、他者の意図に気付き始めていたのではないだろうか。

第4期：意図的行為主体としての他者理解

この時期になると、Aが他者に要求をする際に顔を覗きこむことが療育場面や日常場面でも見られるようになってきた。また、ままごと遊びの中でふり遊びも見られるようになった。子どもの発達においては12ヶ月を過ぎて初めて、要求的あるいは共感的な指さしを行って他者の注意を意図的に操作する行動が現れ、意図的な反応を期待していることを示していると思われる自発的な交互凝視（社会的参照）も現れる。指さしに交互凝視を伴うことに加えて、からかい行動やふり遊びといった表象機能が発達することから、この時期の幼児は明らかに他者を意図的存在として理解していると考えられている¹⁰⁾。Aがこの時期に見せたこれらの行動は、意図的行為主体（intentional agent）として他者を意識しているものと考えられる。

第1期～第4期までの療育場面において、対象児Aは意図や情動をもつ存在として他者を認識するようになってきた。これまでの研究からは、自閉症児は伝達意図をもった存在として他者を理解することに困難を示すことが指摘されてきた。Tomasello（1995）は、幼児期の対人関係においては、意図的行為主体として他者の存在に気付き、その他者の意図を理解していく過程が子どもの

(表) 対象児 A における他者理解の発達の变化

	療育場面での A の様子・変化		他者理解のレベル
療育開始前	「A ちゃん」と名前を呼んでも振り向かない 身体遊びで笑顔は見られるが、すぐに A の注意は他の物に逸れてしま い、「もう 1 回」というような要求は見せない	近距離での対面遊びを拒否 他者からの関わりに反応を示さない A からの要求が見られない	人との関係を拒否
第 1 期 (# 1 ~ 21) 2 : 11 ~ 3 : 04	イナイナイバーをすると視線も合い楽しそうな表情を見せる (# 6) ギョコンバタンでは期待するような表情を見せる (# 6) ボールを投げようとすると A が笑顔で身構える (# 21) 母親への後追い (# 14) ・祖父の膝の上に座ってくる (# 20)	⇒ 対面での遊びが徐々に成立するようになる 担当を意識した行動が見られる 他者への関心が様々な場面で見られるようになる 要求するような表情・素振りが見られるようになる	徐々にではあるが遊んでくれる人 (快適な刺激を生み出すもの) と して他者を認識
第 2 期 (# 22 ~ 49) 3 : 04 ~ 4 : 01	高い高いをするともう 1 回して欲しそうに傍に寄ってくる (# 27) 大人の周りをぐるぐる回ったり、手を伸ばすといった形で要求 (# 32) 筆者の促しでちよūdāいのジェスチャーで要求する (# 30) 高い高いで「い、にっ、さあ」と筆者の言葉を真似する (# 29)	⇒ 要求が表情・素振り以外の様々な形で出るようになる 大人の促しでジェスチャーによる要求を行う 遊びの中で発語 (言葉の模倣) が見られるようになる	行動を発動する主体 (行為主体) として人を認識
第 3 期 (# 50 ~ 75) 4 : 01 ~ 5 : 00	数字を書いて欲しそうに A からちよūdāいのジェスチャーを示してく る (# 60) マットを一緒に遊ぶ中で「びょんびょん」「ばー」等の言葉 (# 58) ボール遊びの中で、筆者が「届かないよー」と言って手を伸ばすと、 ボールをちよūdāいと触って筆者の方まで転がしてくる (# 49)	⇒ ジェスチャーによる要求が自発的に出てくる 発語が様々な場面 (家庭・保育所等) で見られるよ うにやとりの中で相手を意識した行動が見られる ようになる	行動を発動する主体 (行為主体) として人を認識 ↓ 他者の意図に対する気付き
第 4 期 (# 76 ~) 5 : 00 ~	A の望む行動を筆者がわざと行わないと、筆者の顔をじーっと覗き込 み、ちよūdāいのジェスチャーで要求してくる (# 86) ままごと遊びで筆者が食べる真似をすると笑顔をみせ、A もおいしそ うに食べる振りをする。筆者が口を開けると差し出して食べさせてく れる (# 99)	⇒ 要求をする際に人の顔を覗きこむことが多くなる 他者の遊びの展開に対して柔軟に対応 他者の要求にも合わせるようになってくる	意図や情動を持つ存在として人を 認識

社会的発達には必要と指摘している⁹⁾。自閉症児に対してアプローチしていく際には、彼らが他者の意図をいかに理解できるかといった視点が重要と考えられる。

2) 発達の視点に基づいた支援の重要性

前原市で実施されているスクリーニングの結果、生後18ヵ月における自閉症の初期予兆の一つとして、「叙述の指さし」「応答の指さし」「他者の苦痛への反応」「慰め・いたわり行動」といった共同注意項目の欠如があることが明らかになっている¹⁰⁾。本事例の対象児Aにも共同注意項目の欠如が見られているだけでなく、共同注意の原初的段階（対面的共同注意がみられる二項関係）における障害¹¹⁾が仮定された。そのため、特に第1期において筆者は二項関係を重視し、他者への興味・関心や要求行動を促すことを目標として、身体遊びを中心とした関わりを行った。また、療育開始当初は近距離での対面に回避的であったため、なるべく侵入的な関わりを避けて遊びの雰囲気の中で徐々に対面形式での遊びを展開させるように心がけた。

自閉症の共同注意行動の障害は、自閉症児と他者の二者間での注意の共有の困難さが一次的な障害である可能性が指摘されており¹²⁾、自閉症児が人を安全な存在として理解できるようにすることが、二者間、三者間での注意共有を促す上でも療育上重要となってくる⁹⁾。さらに、身近な大人を安全基地として捉える、愛着の発達に対する援助が共同注意形成においてもきわめて重要とされる。またその支援方法については、伊藤（2006）が「情動的交流遊び」と命名するギッコンパッタン、くすぐり遊びなどの身体遊び等が自閉症に対する支援プログラムの中の重要な課題として位置づけている¹³⁾。これらの遊びの中では子どもに笑顔が見られることが多いが、情動共有の成立を基盤としたコミュニケーションの発展をめざした支援方法としてその有効性が検証されている¹³⁾。

本事例の対象児Aも、筆者を意識するような行動が見られるようになり、こうした愛着的信頼関係の形成のなかで対面的な形をとれるようになっていった。そこから他者への要求表現が生まれ、徐々に明確なものになっていった。このように、特に幼児期の自閉症においては共同注意の発達レベルに合わせた支援が重要と考えられる。

3) 地域支援のあり方について

本事例においては、対象児を支援の流れにうまく乗せることができただけでなく、地域資源の有効利用も行うことが可能であった。ここでは、このような地域支援のあり方について検討を行いたい。

杉山（2000）は、発達に問題を抱える子ども達への支援には、二段階の療育システムが必要と指摘している¹⁴⁾。この二段階の療育システムとは、最初に健診でチェック

を受けた子どもを、まず母子遊び方教室的な早期指導の場である一次グループで受け止め、その後発達障害が明らかになった子どもは二次グループである母子通園施設による早期療育グループに移行し、より濃密な早期療育を行うというものである。本事例においても、対象児Aは1歳半健診で運動面に問題が見出されて以降、身体療育訓練やわんぱく広場、発達支援相談を経て個別療育へと参加するようになった。発達障害児への支援を行う際には、保護者を支えつつ次の行動へと向かう気持ちを育てていくことが重要であり、大神（2002）が指摘するように、健診結果をその後の支援に繋げるためには、いきなり療育サービスに紹介するだけでなく、緩やかな地域のフォローのシステムが必要となってくるであろう³⁾。このように、障害を抱えた子どもの保護者が、すぐに情報や支援を受けられる機関と結びついていることや、その時々で経験のある人に家庭外で子どもの世話をしてもらえることが重要¹⁵⁾と考えられる。

また、本事例においては時期が進むにつれて関係機関が広がっていった。筆者は保育所の担任や加配の保育士、言語訓練の担当である言語聴覚士との情報交換を継続して行った。その中で筆者は、Aに対してそれぞれの機関がどのように関わっていくのか、その方針をお互いに共有すること等を留意していた。連携とは、「複数の者（機関）が対等な立場に位置した上で、同じ目的を持ち、連絡をとり合いながら協力し合い、それぞれの役割（機関の専門性）を遂行すること」とされる¹⁶⁾。重要な発達環境としての大人が子どもに対して毎回違う関わりを行うのは望ましいことではないと考えられ¹⁷⁾、本事例においても関係機関が子どもと保護者への一貫した関わりを行うことを念頭に支援を進めていった。関係者がAに対する共通理解のもとで一定の関わりを行ったことが、大きな意味を持っていたと思われる。

付記

本論分の作成にあたり貴重なご意見・ご指摘を頂きました、九州大学大学院人間環境学研究院教授 大神英裕先生に感謝いたします。また本事例の公表を快く承諾して頂いた、A君のお母様、並びに福岡県前原市役所の関係者の方々に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 飯塚一裕（2006） 乳幼児健診後のフォローの現状と課題 発達コロキウム2005（主催：九州大学大学院人間環境学府・前原市、共催：日本発達心理学会九州分科会・志摩町・二丈町）
- 2) Prizant, B.M. & Rubin, E. (1999) Contemporary issues in interventions for autism spectrum disorders:

- A commentary. *Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps*, **24**, 199-208.
- 3) 大神英裕 (2002) 共同注意行動の発達の起源 九州大学心理学研究, **3**, 29-39.
 - 4) Sigman,M.& Kasari,C. (1995) 自閉症児と健常児の様々な文脈における共同注意 Moore,C.& Dunham,P,J. (編) ジョイント・アテンション：心の起源とその発達を探る (大神英裕 監訳), pp. 179-193.
 - 5) 飯塚一裕・税田慶昭・船橋篤彦 (2006) 発達に問題を抱える子どもへの地域支援システムの現状と課題 日本心理臨床学会第25回大会発表論文集 p.475.
 - 6) 石崎優子 (2007) 発達障害児支援のための連携ー小児科医の視点から そだちの科学, **8**, 28-33.
 - 7) 別府哲 (2001) 自閉症幼児の他者理解 ナカニシヤ出版.
 - 8) 別府哲 (2005) 自閉症児の“目”：視線理解と共同注意のもうひとつのかたち 遠藤利彦 (編) 読む目・読まれる目：視線理解の進化と発達の心理学, 東京大学出版会, 179-199.
 - 9) Tomasello,M. (1995) 社会的認知としての共同注意 Moore,C.& Dunham,P,J. (編) ジョイント・アテンション：心の起源とその発達を探る (大神英裕 監訳), pp. 93-117.
 - 10) 大神英裕・実藤和佳子 (2006) 共同注意ーその発達と障害をめぐる諸問題ー 教育心理学年報, **45**, 145-154.
 - 11) 伊藤良子 (2006) 自閉症スペクトラム障害における情動共有とコミュニケーション 自閉症スペクトラム研究, **5**, 9-16.
 - 12) Leekam,S.& Moore,C. (2001)
The development of attention in children with autism.
J.A.Bureck,T.Charman,Yirmiya,&P.R.Zelazo (eds.),
The Development of autism :
Perspectives from theory and research(pp.105-129),
Lawrence Erlbaum.
 - 13) 三宅康将・伊藤良子 (2002) 発達障害児のコミュニケーション指導における情動的交流遊びの役割 特殊教育学研究, **39** (5), 1-8.
 - 14) 杉山登志郎 (2000) 発達障害の豊かな世界 日本評論社
 - 15) Trevarthen,C., Aitken,K., Papoudi,D. & Robarts,J.
(2005) 自閉症の子どもたち：間主観性の発達心理学からのアプローチ 中野茂・伊藤良子・近藤清美 (監訳) ミネルヴァ書房.
 - 16) 田中康雄・佐々木浩治 (2005) 幼児健診と療育機関との連携 こころの科学, **124**, 22-25.
 - 17) 飯塚一裕 (2003) 発達障害児への援助における動

作法およびコンサルテーションの実践 リハビリテーション心理学研究, **31** (2), 49-60.